

No.47 彦坂 尚嘉

Naoyoshi Hikosaka

「赤い作品“母と子を殺した父親のようなもの”、
青い作品“父親に殺された子を受精させた父親のようなもの”」

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成10) 年 7月1日付 立川市市報記事より

ガラス越しに室内からも見え、道路からも見ることのできる換気口の壁に鞍にまたがったような形がふたつある。

両方からの視点に耐えられるような作品をしかも身近な距離から見られるという条件で作ることは結構面倒なことなのだ。

このアーティストは、もともと平面から出発しているが、材料、形、色彩、環境という美術作品を構成する諸要素をどう組み合わせしていくかを考えてきた。その中で、和風でもなく、洋風でもない独自の作品が生まれてきた。

そんな仕事ぶりは、時には日本美術史上の夢の時代でもあった安土桃山の落ちついた絢爛さに行きついたこともあった。

今回の作品はその道筋にあるように思う。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

図書館の入り口前にある通風口の制作とその上に馬の鞍のように乗せる鉄の切り抜き彫刻を作っている。

こういうパブリックアートは初めてなので、難しさを、思い知らされている。

今回のプロジェクトの特徴は、まず、アート空間を入れる都市空間が用意されていなくて、つまり芸術作品を鑑賞する空間がないのだ。

図書館の入り口にモニュメントを設置する空間がない。ないところに、つまり通風口という有用物はあるから、これを同時にアートワークにしようとする斬新な考えなのである。

こういうパブリックアートを例のニューヨークや、パリや、ロンドンなどで見たことがない。どこにも見たことがない独創的なプロジェクトである。

それで私は排気口を独自に作るうとしたのだが、もうすでに建築設計の方でプランが決められていて、しかもこの排気口は、開いて、地下にこの町のコントロール・システムの機械類の出し入れにも使う入り口にもなるとのことで、アーティストの勝手になるのはほんの少しだという。

アーティストがあまり作らないというのが現代美術的だから、このアーティストの作業量を制約するというこのプロジェクトは、コンセプチュアルである。

そこで排気口の高さにこだわって指定した。高さしかいじれなかったのである。

こうして、高さだけが彦坂尚喜制作の排気口ができる見通しになったので、この上に25mmの厚さの鉄板を切り抜いて、しかもこれを曲げた鉄の彫刻を乗せる作業に入った。

随分とたくさんのマケットを作った。

それと問題だったのは鉄の錆だった。結局、塗装することになった。

それでも、とにかく絵画から切り抜かれて、折り曲げて立ち上がった鉄彫刻を置くことで、この清潔できれいなプレハブのような都市の中に、不潔で、悲惨で、無残な人間存在の「明るさ」を、現出させることができれば、と思っている。